

フロイスの大きな夢

宣教師がみた黒田孝高1

姫路では黒田官兵衛の人気があるらしくその顕彰会なるものもありますし、大河ドラマの主演にしようという動きもあります。「官兵衛は生涯側室を持たなかったのでドラマになりにくいと放送局関係者が言った」と、観光客にガイドが話をしていました。なるほど男女関係がドラマの盛り上がりに影響しますから、正室と側室の愛憎劇等のあるほうが視聴率は期待できます。脚本家の創作がポイントになるでしょう。放送局への働きかけは地元の政治経済界のリーダーに任せることにして、ここでは官兵衛がどんな人物だったのかを史料から探ることにしましょう。

彼の事跡を追うとすれば、まず『黒田家譜』を挙げるができます。ために『福岡県史』を見てみると、官兵衛に関する記述は家譜に負うところが少なくありません。つまり、家譜を基本材料にして追跡することが一般的といえます。しかし家譜は黒田家が江戸時代に編纂させたものですから、黒田家に好都合なことが書かれている可能性があることに注意が必要です。

そこで、官兵衛の生きた時代に極めて近く、当時の社会状況もわかる文献を選ぶことにします。ルイス＝フロイスの『日本史』で、これに官兵衛がたびたび登場するのは、『完訳フロイス日本史』として文庫で販売されているので入手するのも容易です（松田毅一・川崎桃太訳、中公文庫）。



彼(官兵衛)はわずか二年前に、(高山)ジェスト右近殿とその父ダリオ、および他の殿たちの説得によって大坂でキリシタンとなった。だが天下の君(秀吉)の重大な用務にたずさわる身であったので、キリシタンになった時もデウスのお話を聞く時間はほとんどなかった。そのようにキリシタンとしての基礎に欠けていたので、(略)とはいえ、彼は大いに期待が持てる人物であり、稀有の才能の持主であるから、教えを聴聞する機会が与えられれば、その信仰はより堅固となり、デウスへの奉仕に役立つ道具となることであろう。（『完訳フロイス日本史』11、p.45:以下、【11】45と示す）

天正12（1584）年、官兵衛は大坂で小西行長や高山右近らの勧めでキリシタンになりましたが、当初はキリスト教を理解していたわけではなさそうです。現代の新興宗教への勧誘でもありそうな話で、右近や行長の巧妙な勧誘が奏功したのでしょう。それについてフロイスは、行長が「この人を動かし、網にかけた」と記しています（1585年8月27日付書簡）。人の不幸に付込むようなことは言わなかったでしょうが、利益になりそうな話があって網にかかったのかもしれない（あくまで想像）。

官兵衛の奉仕ぶりについて、フロイスは次のようなことを記しています。宣教師が司祭館建設のための土地を求めていたことに対して、官兵衛の行った行動です。

元の地所にさらに三分の二を加えて、独自の権限をもって我らに百平方ブラサの地を与えた。彼は国主に、自分が対処したことを承認するようにと伝言した。(略)その山口の市にいる国主の重立った役人たちは、黒田官兵衛の前では自分たちの国主の面前に罷り出る時以上に戦慄していたからである。（【11】46）

毛利領の山口において、官兵衛の権限で宣教師たちに予定より広い土地が与えられてしまいました。「関白は彼を通じて山口の国主と交渉しており、官兵衛は主なるデウスの御為になることならばなんでも喜んで行う旨、誠意をもって申し出ていた」（【4】120）といえますから、毛利家中にとっては官兵衛の言葉や行為は秀吉のそれにほかならず、彼の傲慢ともいえる越権行為にも文句が言えなかったのです（毛利家上層部の指示があったのかもしれない）。かたやフロイスらにとっては、“デウスのお話を聞く時間はないのにデウスのためならなんでもしてくれる”官兵衛は、ほんとに頼りになる「道具」であったのです。

こうなるとますます行長や右近がどんな文句で勧誘をしたのか知りたくなりますが、官兵衛がフロイスらにとってよい「道具」であったことを示す記事をもう少しみてみましょう。

この人(官兵衛)は、ジェスト右近殿が津の国で持っていると同様の大きな勢力を播磨の国で持っており、部下をキリシタンにするだけでなく、筑前殿(秀吉)の顧問、および、彼を父のように思っている備前の国の大身たちを説き伏せようと決心している。（『イエズス会日本報告集』Ⅲ-7）

官兵衛が自領の播磨の国から来るように命じた千人の彼の家臣が当地下関に到着したが、その中には、軍の指揮を司る彼の二人の兄弟もいた。この二人にはただちに聴聞するように命じたところ、彼らは教えをよく理解した後、幾人かの信望のある兵士たち、および日向の国王の娘婿で伊東民部殿と称する一貴人とともに受洗した。（【11】53）

これらを見ればわかるように、布教活動に官兵衛が重大な役割を担うようになっていきます。この頃にはもうデウスのお話を十分に聴聞できていたのでしょう。九州出兵に従軍している播磨出身の将兵や麾下の武将、さらには豊臣政権内の幹部、親交のある武将などを受洗させています。これには官兵衛の人間性によるところもあったでしょうが、やはり秀吉の側近としての立場が大きかったことは間違いありません。フロイスも「ある点において官兵衛殿の人望と権威に負うところはいなめない」（【8】227）と言っています。

官兵衛は上記のほかにも、「小早川殿(隆景)の弟」「阿波の国の絶対君主阿波守」「毛利の国のムサダ殿」「豊後の嫡子(大友)義統」らを受洗させることに成功しました（【8】227）。これで九州平定後小早川一筑前・筑後、大友一豊後・日向（伊東一日向）、黒田一豊前と九州の半分近くはキリシタン大名の支配国となり、一気に領民の改宗が期待できるとフロイスは考えていました。

このように、フロイスにすれば「主なるデウスが望み給うた改宗の道具として挙用された」（【8】226）官兵衛ほど利用価値のある日本人はいなかったことでしょう。官兵衛を重宝な「道具」に使って、“フロイスの大きな夢”が叶えられようとしていたのです。

